

## シマイズセンリョウとオーガストノキについて（山崎 敬）

Takasi YAMAZAKI: On *Maesa tenera* Mez and *M. angustinii* (Nakai) Tuyama

イズセンリョウ属の中でイズセンリョウ節 *Doraena* は種数も少なく、分類学上問題は少ないが、シマイズセンリョウ節 *Dartus* は種数も多く、しかも花の形がよく似ていて、分類の難しい群である。シマイズセンリョウ *M. tenera* Mez は九州南部、琉球、台湾、中国南部に分布していて Walker (1940) の研究以後あまり問題ないものと思われていたが、中国科学院昆明研究所の陳介 (C. Chein) 氏は雲南植物誌第1巻 (1977) で、*M. tenera* Mez は広東にのみ分布し、台湾で *M. tenera* とされていたものはインドから報告されヒマラヤ、ビルマ、インドシナ、中国西部に広く分布する *M. montana* A. DC. であると報告した。中国植物誌 58巻 *Ardicaceae* (1979) でも同じ主張をしている。日本のものには直接触れていないが、引用している異名から日本のものと同じとして扱っているのは明らかである。

*M. montana* A. DC. はヒマラヤでは珍しいものではないので、日本にも多くの標本があるし、インドシナからの標本もかなり存在する。シマイズセンリョウと比較すると、標本では花や葉の形は同じで区別できない。ただこの節の種類は花や葉は良く似ていてもすぐ同種とするわけにはいかない。両者の差異は *M. montana* には若枝、花序の軸、花柄、萼筒などに微小な点状の毛が密生しているけれど、シマイズセンリョウは無毛であるのが異なる。しかし日本のシマイズセンリョウには時に花柄に微小な毛のあるものが見られる。台湾では無毛のものがほとんどであるが、しばしば花序軸や花柄に微小な毛のある個体がでてくるし、台湾南部の大武山付近には *M. montana* ほどではないが、それに近いほど毛の多いものもある。したがって両者は毛の性質では連続すると見られる。大陸のものと台湾、日本のものは同種であるとする陳氏の見解が正しいと思う。しかし毛の量には明らかな差異があるので、変種程度の違いとして扱うのが妥当であろう。

*M. tenera* Mez は馴染まれた名ではあるが、陳

氏は別種として扱っている。しかし葉の形だけで区別しているので、恐らく同種だと考えられるが、基準となる広東の標本は1枚しか見ていないので結論はだせない。シマイズセンリョウの学名には台湾、琉球のものから *M. tenera* と同時に記載され、シマイズセンリョウに間違いない *M. formosana* Mez を当てるのが適切である。

シマイズセンリョウに関係した、今まで知られていない事を記録しておきたい。硫黄列島の南硫黄島からオーガストノキ *Maesa angustinii* (Nakai) Tuyama が報告されている。これは現在ではシマイズセンリョウの異名とされている。南硫黄島に野生するものがシマイズセンリョウであることは Walker (1940) に依って明らかにされている。しかし、中井猛之進氏が新種であるとした基礎になる標本に問題がある。これは青木専蔵氏が1930年、漁船で南硫黄島に上陸して採集したものを、父島の林業試験場で栽培し、1932年に中井先生に送付されたものである。この標本は枝、花序、萼筒などに微小な毛が密に生え、シマイズセンリョウとは明らかに異なるので、それとは別種としたのは当然である。それで同島の外国语名 *Saint Augustine Is.* から名をとり、新種として発表したものである。しかし其後同島から採集されたものは総て無毛で、シマイズセンリョウと異なる。青木氏が1930年に採集した標本の一部が東大に保存されているが、これも無毛品である。従って試験場から青木氏のものを栽培したとして送られてきた標本は、青木氏のものとは別物と考えざるをえない。この標本は *M. montana* A. DC. と一致する。父島の林業試験場では、熱帯地方から色々な種子を入れて栽培していたので、そうした栽培種が混同された可能性がある。上記したように *M. montana* とシマイズセンリョウとは近縁のものなので、南硫黄島からこうした型の個体が見つかる可能性も否定できない。しかし青木氏の採集品と試験場のものとが別であることはほぼ間違いない。

硫黄列島にはシマイズセンリョウの他、フヨウやノボタンの類など、小笠原諸島や太平洋諸島のものとは関係なく、琉球に関する植物が見られることは興味深い。

**Maesa montana** A. DC. var. **formosana** (Mez) Yamazaki, stat. nov.

*Maesa formosana* Mez in Pflanzenreich 9, IV-236: 29 (1902).

*Maesa tenera* Mez sensu Walker in Philip. J. Sci. 73: 34 (1940), p. p.

*Maesa augustinii* auct. non Nakai: Tuyama in Bot. Mag. Tokyo 52: 467 (1938), excl. type specimen of Nakai.

Distr. Taiwan, Ryukyu, S. Kyushu and Minami-Iwojima in Sulpher Islands.

The type specimen of *Maesa augustinii* (Nakai) Tuyama was collected from a cultivated stock in Chichijima Forestry Experimental Station, which has been believed to send back from Minami-Iwojima (St. Augustine) island in the Sulpher Group of islands. It becomes clear that the specimen is identical with *M. montana* A. DC. var. *montana*. However, the variety has been not found from Minami-Iwojima.

It is thought a strong evidence that the type specimen did not collect from any Minami-Iwojima-originated-stock in the Experimental Station.

(東京大学理学部附属植物園)

## 日本に帰化しているナガボソウ属植物の学名 (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: Scientific Name for *Stachytarpheta* Naturalized in Japan

ナガボソウは1888年(明治21年)に *Stachytarpheta prismatica* Vahl の名で小石川植物園で栽培された標本が残されている。松村任三氏の *Index Plant. Japon.* 2: 533 (1912) にこれが記録された。此の頃ナガボソウ(長穂草)またはモクマベニ(木馬鞭)の名がつけられた。この植物は後に中井猛之進氏によって *S. dicotoma* (Ruiz. et Pav.) Vahl と同定され、松村氏の改定日本植物名彙 2: 386 (1916) にはこの学名で載せられている。東大の標本には異名として *S. urticaefolia* (Salisb.) Sims が引用されている。当時では両者は同一種と見なされていたので、ほぼ正しい名であった。これと同じものが小笠原の父島に古くから帰化している。東大にある一番古い標本は1920年(大正9年)なので、明治末か大正の初め頃、観賞用として持ち込まれたものが逸出したのであろう。戦後新来の帰化植物に押されて山地に入っているが、旺盛な繁殖をしている。これにはナガボソウの和名が当てられ、学名は *S. dicotoma* Vahl を使っていった。その後どういう理由か不明だが、学名は *S. jamaicensis* (L.) Vahl に改悪

され、それが長年通用していた。

戦後、沖縄に多数の植物が帰化したが、この中に2種類のナガボソウ属のものがある。初島住彦氏(琉球植物誌、1971)はこのひとつをナガボソウとし学名に *S. cayennensis* Vahl を当て、もうひとつにフトボナガボソウと新名をつけ学名は *S. jamaicensis* (L.) Vahl とした。したがって小笠原のナガボソウは和名と学名とが分離して別々のものに当てられたことになる。調べてみると *S. jamaicensis* はフトボナガボソウに当てるのが正しいことがわかった。初島氏の処置が正しいので、長年ナガボソウにこの学名を使用していたのは誤りであった。Walker (Fl. Okinawa, 1976) は Moldenke の協力のもとにナガボソウの学名に *S. urticifolia* (Salisb.) Sims を使用した。ナガボソウはこの100年の間に *S. prismatica* から始まって、*S. urticifolia* まで5つもの学名の変更があったわけである。この学名は最近の琉球植物誌に使われ始めたが、まだ一般にはよく知られていない。

最近ジャワを旅行した際、この類を見る機会が